

昭和三年十月間宮老師が安住寺来訪
右より二人目が玄海和尚、天心居士
養徳寺和尚、玄道和尚他



翌年、川島昭隠老師が美濃太
田市伊深の正眼寺へ転住するこ
とになり、二十数名の雲水と同
専門道場に転錫。大正十四年に
安住寺の副住職になるも、昭和
五年姫路市網干区の名刹龍門寺
(妙心寺派)へ入り、八年に住
職となりました。昭和十四年に
安住寺に戻ると、元方広寺
派管長の間宮英宗老師に随侍し、
京都の仏教会館(山口玄洞居士
の寄進で設立)での活動や、南
支や台湾へも布教活動に随行し
たと聞いています。

(前ページの続き)

安住寺住職に就任後、間もな
く日本は戦争に突入。和尚は留
後の任に当り、寺を青年学校に
提供。弟子も多く養育したが、
後任と決めていた森玄秀師は南
方で戦死。玄規士は萬壽寺僧堂
に在錫中。私が入門する時には
小僧が一人も居ない状態でした。
昭和四十年一月には、本堂、
位牌堂、観音堂を焼失。続いて
先住玄道和尚が遷化するなど、
苦勞の絶えない一代だったかも
知れません。他方、宗会議員や
市仏教会長、民生児童委員、保
護司等も努め信望が篤く、温
和で立派な師匠でした。

回顧

玄海和尚との
十年間

私は、昭和三十八年四月に玄
海和尚の弟子になりました。中
学校三年生の時です。和尚は、
六十八歳。炊事役の工藤ケサヲ
さん(六十代)と三人の生活が
始まりました。

最初に習ったのが朝課のお経
です。二日後には、初めての葬
儀が有り、玄道和尚と三人で務
めました。お経は、安住寺に來
てからですので、学校の勉強は
二の次状態でした。
朝は早く、五時に起きて晨鐘

朝課、拭き掃除。外が明るくな
つてから門前の掃除です。五時
に起きても学校には時々遅刻す
ることがありました。夜は、九
時の開枕諷經を終え、和尚に「
お休みさい」の挨拶で、一日が
終了です。
和尚は、数年前に軽い脳梗塞
を患っていて、杖を使うのと軽
い言語障害がありました。性格
は、基本的には温厚な人ですが、
時にはカツとなつて怒ることも
ありました。



昭和41年12月 本堂再建後の決算報告会
総代世話人一同と 和尚の右に玄規、玄徳、玄孝

私の僧名「玄徳」ですが、何
人も小僧を育てたのに、それま
で良い縁が無かつたとの理由で
今まで一番出来の良かった名
前にしようと、工藤の婆さんと
松平氏が杵築を治めるようになり
今のような城下町の区割りが出来
寺町に安住寺も再建されました。
三室和尚が中興開山となります。
寺の過去帳には、寛文年間(一六
六一)からの記載が増えていま
す。大檀越である木付氏の支えが
無くなつてからの再建は大変だつ
た事だろうと推測されます。
第四世の月叟和尚は、享保三年
に遷化していますが、上記の年譜
のとおり百年間に七名の住職が代
つていきます。詳細な記録はありま
せんが、難儀をされたことだけは
大いに推測できます。



大内 藤原満家の仏事にて S40.9



頂相を依頼するために撮
った写真。S42.11(73歳)

安住寺だより 号外
三先師合齋会特集
禪の心
発行 安住寺
編集 閑栖 矢野 玄德

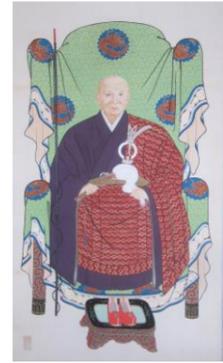
齋会日程

檀信徒有志
参列し厳修

令和三年十一月九日 十一時
導師 萬壽寺閑閑窟老師
出頭 部内・近隣・縁故寺院



月叟和尚
げっそう



玄海和尚



三室和尚

この度、玄海和尚の五十回忌に
当り、併せて中興開山三室和尚三
百五十年、第四世月叟和尚の三百
年遠諱を厳修することになりました。
中興と四世和尚は、久方振りの齋
会となります。当然のことですが、
夫々歴代和尚の護持と檀信徒の支
えが有つて、今日が有ります。
安住寺は、開山聖一國師、初代
木付親重公の開基によつて創建さ
れましたが、天正十四年(一五八六)
島津藩の豊後攻めの折、兵火に遭
い伽藍を焼失。続いて一五九三年
の文禄の役で、木付十七代統直が
家臣を率いて出兵したが、秀吉の
嫌疑により、お家没収となつてし
まいました。
その後、正保年間(一六四四)

第十五世玄海禪聰和尚の略歴

玄海和尚は、幼名金石太六と言
い、明治二十七年十二月十日西国
東郡三浦村に出生。九歳の時、叔
父で古野の清水寺住職安辺興道
和尚の導きで安住寺梁州和尚の弟子
となりました。学業は、京都の聯
合般若林、花園臨済大学へ進学し
大正七年大徳寺専門道場に掛搭。



花園臨済大学在学中
僧名は金石禪聰